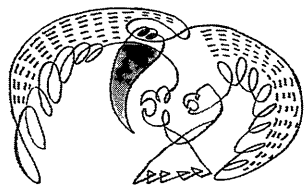
岳　3　月

宮坂静生
推　　薦

碧空や枝に雨氷のタランテラ　佐藤映二
寒鯉の身じろぎもせず断たれけり　満田光生
一志さん越後は深雪晴ですよ　清水逍径
けらけらと鴛鴦の笑ひに誘はるる　栗原利代子
凩や肉に揉み込む潮麹　久根美和子
菰巻の蘇鉄遍路に発つごとし　宮岡光子
絹糸のごとき声なり鳴き兎　伊藤由希子
年の果時間吸ひ込まれし如く　長尾裕美子
寒卵掌に置き癒えていく心地　市川美八子
冬鳥の飛び交ふ鞄売場かな　森　千恵子
かんぐれや深雪の胎(はら)の安らけし　松井　弓
じやぶじやぶと漬菜を洗ふ哲の忌よ　中村喜久恵
鷹鳩と化せばガザまで翔んでゆけ　大月英晴
どんどの炎兵士の如く燃え落つる　小熊里利

*

遥けき日癌病棟へ聖歌隊　西牧千恵子



打ち揃ひ折へぎ折の十四日蕎麦　米山節子
神渡りに不倫の道もありぬべし　樋上照男
いつからか浅間山は佐久の飾臼　阿部萌子
元日の眠るしかない寂しさよ　森山夕香
満開といふを知らざり返り花　奥山源丘
水餅の呪文唱へて沈みけり　金子圭子
正中線ありし土偶や冬木の芽　石川定雄
雪催淋しら売りの来さうなり　志摩晴樹
あの頃は押し屋のバイト大根積む　冨岡詔子
この森は夕日の為に年つまる　柳澤和子
初夢に冬虫夏草採る男　吉澤　清
このごろの曖昧晴や枇杷の花　志田　成
褒めて伸ばすしつけ講座や狩の犬　滝川陽子
愛日や磧の蔦の男前　布山千土里
みすずかる御神酒の口を懐かしむ　古畑富美江

新たなる半世紀へ ―― 岳俳句三月

宮坂静生

巻頭言　『「方言コスプレ」の時代』（田中ゆかり・岩波現代文庫）を読み、「なんでやねん！」と関西弁で驚き、「そうずら」（そうですね）と信州弁で納得した。「コスプレ」は「ことばのコスチューム・プレイ」（言葉が衣裳のように流行すること）。テレビやSNSなどでおもしろおかしく、方言が盛んに用いられている。現代は方言の時代だという。話言葉が主であるが、地貌季語など地域の言葉への関心もどこかで連動するのであろう。これとは別であるが、コンピューター用語が俳句に使われ出し、私は日本語として大いに疑問に感じている。改めて考えたい。俳句が難しくなりすぎる。

雨氷のタランテラとは―これはコンピュータ用語ではない。何でしょうか。

碧空や枝に雨氷のタランテラ　佐藤映二

調子がいいが、イタリア南部の港町（タラント）由来のテンポの早い舞曲である。雨氷は氷点下に雨や霧が枝に氷ったもので、過日出会い、感激した。ここは樹氷とは違う雨氷の輝きから激しい舞踏を連想したものか。溶け出したのでない。真冬の快晴の青空を背景にした雨氷の荘厳を讃えたものと読みたい。

寒鯉の身じろぎもせず断たれけり　満田光生

ジタバタしないで鋭い出刃包丁でスパッと断たれた。俎の鯉である。私も〈寒鯉の水の筋金呑みしごと〉と詠んだことがある。その寒鯉の末期かといささか哀悼の意をささげたい。作者は寒鯉を詠み何を思ったのか。人の非情さではなく、非情そのもの。武士の世の潔さとでもいえば、これは物語の世界の話。ここは現実の厳しさ。理屈を超えたもの。俳句表現には素っ気ないほど非情さがある。

一志さん越後は深雪晴ですよ　清水逍径

問答句の形をとりながら、亡き一志貴美子追慕の句になっている。〈湯守の一世深雪を諾ひつ　貴美子〉と越後の雪深い温泉地の湯守を詠んだ句がある。松之山温泉あたりか。作者逍径は句に応えて、あなたの詠まれた深い雪の中で今も元気ですよ。あなたのおられるところはどうですか。柳田邦男先生が言う「死後生」の作。俳句を思い出すことで、生前の「精神」が「魂」に響き「いのち」が繋がっているのである。

凩や肉に揉み込む塩麹　久根美和子

外は凩、厨では美味しい肉料理作り。情趣を剝いだ構図を描く。いわば職人の世界と同じ。ここから生きるとは何か、生き甲斐とは何かと、もやもやが暮らしを揺することになる。

菰巻の蘇鉄遍路に発つごとし　宮岡光子

防寒のための冬囲いの蘇鉄。そのさまから遍路行を連想した。旅姿の蘇鉄。ユーモラスな連想であるが、作者の中に、遍路に寄せる自分とはなにか、生きるとはという現状の奥に

脱皮を求める探求心があるのであろう。精神の自由への憧憬。

絹糸のごとき声なり鳴き兎　伊藤由希子

北海道に棲息する鳴き兎。地貌季語「鳴き兎」詠は珍しい。探求心がある。大雪山の麓で聞いた鳴き声を思い出したが、掲句には作者の憧れが流離の思いに籠められているか。

年の果時間吸ひ込まれし如く　長尾裕美子

一年の時間が吸い込まれる大きなタービンでも回っているのか。大晦日とはそんな感じ。一日一日の現在がたちまち絵巻物のように巻かれて最後に一日に纏められる。その隠された裏には寿命という哀感がある。掲句は表の句であるが。

寒卵掌に置き癒えていく心地　市川美八子

寒卵を手にした歓びを「癒えていく」と病態の言葉を用いたのは、日頃のともすれば閉ざされた思いを抜け出したいという素直な思いからであろう。ナイーブな作者。今年は句作を気持の立て直しにしたいという意欲が伝わる佳吟である。

今月の秀句

けらけらと鴛鴦の笑ひに誘はるる　栗原利代子

湖上に仲よく鴛鴦が泳ぐ。ときに離れてまた揶揄い合う。それを「けらけら」笑いと見た。擬人化には違いないが、表現がリズミカルでいい。大胆だ。こんな言い方でいいのかと迷いがあった。それに踏ん切りをつける決断が潔い。言葉は気合い。飛躍とは作者の迫力で読み手を頷かせるものだ。

冬鳥の飛び交ふ鞄売場かな　森千恵子

愛知県あま市に居住。海沿いの店舗には時に鷗など海鳥も飛来するものか。海岸に張り出した店舗の売り場が想像される。自由な想像を刺激する作である。

かんぐれや深雪の胎の安らけし　松井弓

「かんぐれ」とは紙漉きの作業の工程で漉き重ねた紙床を雪に埋め、保存後に掘り出し、雪の上に板干しする。母胎のような深雪から真っ白い紙が生まれる。紙漉きの祈るような思いがそこにある。

じやぶじやぶと漬菜を洗ふ哲の忌よ　中村喜久恵

アフガンの荒野に堰を築き水を引いた博愛の医師中村哲の忌日は十二月四日。日本の山国信州では漬菜洗いの頃。わが身の水を介した手作業から異国での偉業を偲んだ連想が尊い。

鷹鳩と化せばガザまで翔んでゆけ　大月英晴

三月半ば（十六日頃から二十日頃）仲春の候、中国の啓蟄の終わりの時期には「鷹化して鳩と為る」。途方もない明るい季語に時事の夢が託されたもの。作者の開眼の句か。

どんどの炎兵士の如く燃え落つる　小熊里利

小正月のどんど火から戦場を凝視した句に転換。反戦を願った比喩の大胆さに仰天した。

癌が句材になる。これからいかに詠まれるか。

遥けき日癌病棟へ聖歌隊　西牧千恵子

ひっそりした癌病棟に、クリスマスの日、癌患者への慰問に聖歌隊がやってきた。「遥けき日」と、ある年の体験詠の形で詠まれている。珍しかったものか。どこかホスピス病棟が思われる。終末期を迎える病者もいる。私の少ない体験の中で、到底キリスト信仰など想像も及ばなかった師がクリスチャンに入信した。死を目前に、キリストによる救済が明快であったのか。阿弥陀如来よりも明るい雰囲気が漂う。掲句も波のような「聖歌隊」に惹かれる。

打ち揃ひ折ぎ折の十四日蕎麦　米山　節子

今月の秀句

雪催淋しら売りの来さうなり　志摩　晴樹

古語が持つ伝承の森から言葉が掬い上げられたようだ。「淋しら売り」の淋しらとは淋しいさま。淋しい思いは日本人の感情では人気ナンバーワン。一番微妙で深い情感である。雪が降りそうだ。淋しさいらんかねと、「淋しら売り」が来そうだな。歌人西行は〈さびしさに堪へたる人のまたもあれな庵ならべん冬の山里〉（淋しい思いにじっと堪え通した人がいるといいなあ、そんな人と庵を並べて住みたいものだ）と詠んだ。作者は日本語のプロ。独自な発想が光る。

小正月の前日、十四日蕎麦を食べる。これが新潟の長岡市東谷の風習といい、越後の地貌季語である。小正月に蕎麦を食べることで、豊作を祈る連帯感が深まるのであろうか。

神渡りに不倫の道もありぬべし　樋上　照男

諏訪の御神渡りとは、上社の建御名方命が下社の八坂刀売神へ一途に通う道。それだけですかね。横道がきっとある。昔から神様は浮気。諏訪湖の御神渡も横道だらけでは？

いつからか浅間山は佐久の飾臼　阿部　萌子

面白い句である。今月の秀句候補にしていたのであるが、「飾臼」が比喩なので季語として実意が薄い。正月の飾臼を見たことから浅間山へ目を留めたものと理解できよう。

元日の眠るしかない寂しさよ　森山　夕香

確かに元日くらいやることがない日は珍しい。初詣へ行くほど信心がない。新聞はみるところなし、お笑い番組もダメ。一年で一番希薄な日になりつつある寂しい日かな。

満開といふを知らざり返り花　奥山　源丘

ぽつぽつという咲き方だ。爛漫の返り花は眼にしたことがない。〈返り咲く花は盛りもなく散りぬ　下村梅子〉があるが、満開と盛りとは意が違う。なるほどと思わせる。

水餅の呪文唱へて沈みけり　金子　圭子

水餅がぶつぶつ呟きながら器の底に沈む。それを呪文とみた。水餅が格好つけたものか。正月の餅も最後、もう終わり。そこで水餅もおだぶつ気分か。巧い句である。

正中線ありし土偶や冬木の芽　石川　定雄

妊娠するとお腹にお臍まで線が通る。妊娠線だ。縄文の土偶にも線があるとは、縄文人がすでにリアルな眼力を持っていた証拠であろう。気付きが秀逸。

あの頃は押し屋のバイト大根積む　冨岡　詔子

「押し屋」が面白い。昭和三十九年、東京オリンピックがあった年あたりか。ラッシュ時に乗客をホームから電車に押し込むアルバイトだ。尻あたりに手を当て隙を狙い押し込む。「大根積む」は荷車に大根を積めるだけ積んで畑道から本道へ出す。三浦半島当たりの風景も浮かぶが、どちらだろうか。前者だと大根は比喩、大根足か。後者はリアルな光景。

この森は夕日の為に年つまる　柳澤　和子

さりげない句が光る。大晦日、眼前の森に日が沈む。美しい。いつも夕日がいいが、ことにいよいよ今年最後と思うと格別。本誌での活躍が長老級の作者、句会のまとめ役であり、現役の俳人としても力が衰えない。生き方に迫力がある。

初夢に冬虫夏草採る男　吉澤　清

冬は虫、夏には草（茸）になるという。「冬虫夏草」とは漢方薬店で広告を見た記憶がある。蟬の幼虫や蜘蛛などに寄生する菌類である。癌細胞を抑制する効果があるとか。書の大家の作者が見る初夢は中国四川辺の不思議な夢。知が働く。

このごろの曖昧晴や枇杷の花　志田　成

枇杷の花咲く十二月、「曖昧晴」が秀逸。晴れるのか曇るのか雪になるのか、世情と同じく、天気もぐずぐず。巧い。

褒めて伸ばすしつけ講座や狩の犬　滝川　陽子

子どもをイメージしたところが、「狩の犬」とはお見事。なるほどこれは人間よりも素直、率直、お利巧。

愛日や磧の鳶の男前　布山千土里

「愛日」とは中国の「春秋左伝」に見える冬の日光の意。珍しい呼称だ。鳶の鋭い貌が男前とは。荒涼たる磧を背景に、普段の俳句心が探した着眼に感銘した。

みすずかる御神酒の口を懐かしむ　古畑富美江

正月に徳利に差し神棚に供える竹製の小さな御幣。「御神酒の口」が正月の地貌季語。信州は松本辺の秀逸な民藝品。気付きがいい。生きる意欲が言葉の発見に繋がる。

他に推薦候補作をあげる。

梅干婆になつてしまひぬ初鏡　斉藤すみれ
両の手に湯気の孵るや雑煮椀　岩上　諒磨
雪空や身の内いつも真くらがり　横地　妙子
コンビニの灯の浮く年の湊かな　鏑木ひろこ
父の髭肖似中村哲忌なり　吉池　史江
妻八十路首筋青く冷めゆきぬ　倉科　繁登
冬の星砂丘を覆い尽すべく　松岡　善郎
石垣島甘蔗の花を死者の辺に　坂井　久男
一つ田に烏百羽や餅配　上原　富子